



とやまの チューリップ

雪が咲けた、彩りと香り。



人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語 | VOL.2



厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド 「とやまのチューリップ」認定事業者

富山県花卉球根農業協同組合
砺波市大門381
TEL.0763-33-2448
<http://www.tba.or.jp/>

戸出町チューリップ切花生産部会
高岡市西藤平蔵226-1
TEL.0766-63-7334

黒東チューリップ切花出荷組合
下新川郡入善町入膳3461-1
TEL.0765-74-2440

株式会社センチア
砺波市高波1664-2
TEL.0763-33-6281
<http://www.scentia.co.jp/>

砺波切花研究会
砺波市宮沢町3-11
TEL.0120-187-173
<http://www.ja-tonamino.or.jp/>

富山県観光・地域振興局地域振興課
TEL.076-444-9605 <http://toyama-brand.jp>

雪のベッドに抱かれて、

球根

たちは夢を見る。

「10個の球根から
はじめた夢」

すべてのものが、白色に塗りつくされる冬。散居に降り積もった分厚い雪の下で、チューリップの球根は、やがて訪れる春の景色を夢見る。

水田が水をたたえ、陽に反射して輝く。無数の緑の島が、海に浮かんでいるように見える散居村の春。そこかしこには、美しい彩りで咲き誇るチューリップの花畑。そんな情景を想いながら、雪の下の球根たちはまどろみの時を過ごす。

富山県砺波市。富山県が全国に誇るチューリップのふるさと。富山のチューリップは、品質の高さ、オリジナリティから国内市場で高い評価を受ける。

90年あまり前、この地で花に心血を注いだ若者がいた。水野豊造である。

花が好きだった豊造は、10球ほどの球根を手に入れ、チューリップ栽培に挑む。砺波の小作農家は雪と闘ってきた。「雪に埋もれる砺波で、花ができるはずがない」と言う人もいた。

やっかい者と思われていた



球根が植えられた畑の高うねに雪が降り積もる

写真提供：砺波野.JP



富山のチューリップの父 水野豊造



昭和12年の球根出荷風景

雪は、球根栽培には恵みとなった。地中の温度と湿度を一定に保ち、霜柱から球根を守った。雪は冬ごもりする球根のふかふかのベッドだった。あるとき、花を切り取った後の球根を調べた。ふつくと育った見事な球根だった。「砺波の風土はチューリップに適している。日本一の球根産地をめざそう」。豊造は決意する。

「生産者一丸で
球根生産県をめざす」

「父はチューリップに心底惚れていた。いつも熱く、『機関車』と呼ばれていた」と豊造の四男、水野嘉孝みずのよしただかさんは語る。

「大産地になるには、個々の利益だけを求めるのではなく、生産者が団結するこ

とが不可欠だ」。豊造は周囲に訴えつづけた。

豊造の熱意に共感した人たちは昭和23年、県内初のチューリップ専門農協である「富山県花卉球根農業協同組合」を結成。「魂でつくれ」を合い言葉に、球根の一元集荷や新品種の導入など高品質球根の生産に努める一方で、輸出にも全力で取り組む。

「良い球根かどうかは花が咲くまでわからない。『球根は信用が命』というのが父の口癖だった」と嘉孝さん。組合員のためまぬ努力と

研鑽により、昭和39年には、輸球が1929万球を達成。昭和48年には出荷球数が4481万球を記録し、富山県は日本の球根生産県となる。わずか10球の球根から始まった夢が、ついに実を結ぶ。

チューリップは
魂でつくれ、
を合い言葉に。



砺波市のチューリップ生産者 水野嘉孝さん

腹をすかせた球根に、 雪解けの水が乳をやる。

「水と土の恵みが 球根に味方した」

「富山県は、雪以外にもチューリップが育つ好条件が揃っていたんです」と富山県花卉球根農業協同組合の水越ひさおさんは話す。庄川、黒部川など幾筋も

の河川によって形成された扇状地は、水はけのいい砂壤土地帯。そこには、水田に水を引くための灌がい用水が縦横に張りめぐらされている。豊富な水と水はけの良さが揃った富山県の扇状地は、生育段階に合わせた水分供給が決め手となるチューリップ

ブ栽培にとって、またとない好適地であった。

水田裏作として秋に植えられる球根は、翌年の春に芽を出すまで土の中でじっと耐える。根を伸ばし、萌芽して肥り始める4月から5月は、水分をたっぷり欲しがらる。反

対に、6月からの充実期、収穫期は水を嫌う。

春にはゆたかな雪解け水がある。乳をむさぼる赤ん坊のように球根は水を吸い、すくすくと育つ。乾燥が必要なら6月には、水はけの良い土壌が球根の充実に味方する。「適地であったこと、何より、チューリップに人生を捧げたリーダーたちがいたこと。このことが、富山を日本一の球根生産県に育てたのです」（水越さん）

「品質管理にも 息づく豊造イズム」

同組合では、県内で生産されるすべてのチューリップ球根を対象に、「富山県球根検査条例」にもとづく厳しい検査を行っている。

まずは、ほ場で生育中の球根を対象に、生育状況や異品種混入、病害虫の有無を調べるほ場検査が実施される。合格した球根は掘り取った後、品質や形状などを調べられる。検査にパスしたものは、さらにきめ細かな格付が行われる。幾つもの関門をくぐり抜け、ようやく全国の市場へと出荷される球根は、その確かな品質において、各地の種苗業者から絶大な信頼を得る。「魂をつくる」豊造イズムが、ここにも息づいている。



入善町に広がる黒部川扇状地は、砺波と並ぶチューリップの産地である

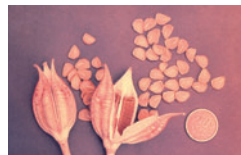


上：洗浄して乾燥させた球根。美しいツヤを見せる

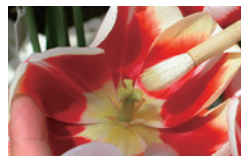
下：球根を肥らせるための摘花作業。落ちた花びらによる病気感染を防ぐ目的もある



2100もの品種が保存栽培される園芸研究所試験ほ場



交配から生まれた新品種の種



年間約700組の交配が行われている

球根技術が活きる切花生産

チューリップへの情熱は受けつがれ、新たな熱い息吹が生まれている。砺波市や高岡市、入善町では、チューリップの切花生産に取り組む。富山県のチューリップ切花

愛された花は人を幸せにする

富山県農林水産総合技術センター園芸研究所の試験ほ場には、様々な品種のチューリップが栽培されている。世界中に数千種あるといわれるチューリップのうち、同研究所遺伝資源センターでは約2100の品種を保存栽培する。これらを材料にして、病気に強く、市場性の高い新品种を開発するため、日々、研究が行われている。同研究所や県内農家が育

球根の植え付けは11月。農家が総出で作業を行う

今も昔もみんな、チューリップに惚れている。

成したオリジナル品種はおよそ130品種。そのうち、「黄小町」「白雲」などの4品種は、世界一のチューリップ王国であるオランダでも品種登録されている。

交配して種をつくり、最初の花が咲くまで5年、新品種として発表するまでなんと20年。気が遠くなるような年月を経て、チューリップは産声を上げる。研究員や生産者にとって、それまでの苦労が報われる瞬間である。

春、東京銀座の通りでは、富山のチューリップ20万本分の花びらが300メートルにわたってストリートを埋めつくす。恒例のイベント「銀座みゆき通りフラワーカーペット」。色とりどりの花卉によって描かれた15枚の絵が、まちゆく人の心を和ませる。

雪国の温もりに抱かれ、人に愛されて育ったチューリップは、今度は故郷を遠くはなれた場所で、誰かを幸せにする。



上、中：生育状況を調べる特性調査や、組織培養による品種増殖など、一つの花が生まれるまで何年もの時間が費やされる。下：「黄小町」は富山県のオリジナル品種

message

咲いてほしい日に咲かせる技術

みやぎまさよ
宮崎雅代さん
チューリップ文化振興協会理事



「トビアー」をはじめ、植物を使ったオブジェの魅力を伝える活動をしています。品質の確かさと品種の豊富さが特長の富山のチューリップですが、開花時期を自在にコントロールするような高い技術があることも見逃せません。花を飾る環境や条件に合わせて、生産者の優れた技が、イメージどおりの美しさを演出してくれます。

【関連施設】



砺波が誇るチューリップの博物館。

ガラス張りの建物で、一年中チューリップの魅力に触れ合える。カフェやショップのほか、県内生産者が育てたオリジナル品種も展示。隣接の砺波チューリップ公園では、毎年4月下旬から5月上旬まで「となみチューリップフェア」が開催される。

チューリップ四季彩館

〒 砺波市中村100-1
☎ JR砺波駅より徒歩15分
☎ 0763-33-7716
🕒 9:00~18:00
🗓 水曜・第3木曜(祝日の場合開館)、年末年始
👤 小・中学生150円、大人・高校生300円、65歳以上 240円